

Title	日本語研究のインターフェイス
Author(s)	三宅, 知宏
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58530
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について <a>〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	三宅 知宏
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 24142 号
学位授与年月日	平成 22 年 7 月 22 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	日本語研究のインターフェイス
論文審査委員	(主査) 教授 工藤真由美 (副査) 教授 渋谷 勝己 教授 田野村忠温

論文内容の要旨

本論文は、現代日本語を主たる対象として、音韻論と形態論、統語論と意味論、意味論と語用論という領域間の接点に着目した研究であり、本文 229 頁よりなる大著である。

第 I 章「はじめに」では、概念意味論、生成文法、認知言語学等の言語理論を援用しつつ可能な限り客観的な説明装置を用いて、従来指摘されていない言語現象の観察や一般化を行うことが本論文の目的であると述べる。

第 II 章は、音韻論と形態論のインターフェイスに関わる問題を取り上げる。第 1 節では、複数のアクセント型をもつ複合語における語基と接辞という形態素レベルの違いとアクセントとの対応関係について考察し、接辞的用法と平板型アクセントに密接な関連性があるという一般化を提示する。第 2 節では、格関係、等位関係、修飾関係という語の内部関係と連濁等の音韻現象の関係について考察し、音韻現象に関して制約のない修飾関係にたいして、等位関係は音韻現象を起こしてはいけない構造、格関係は起こさなくてもよい構造であるという一般化を導く。第 3 節では、語の形態的な枝分かれ構造がもたらす半濁音化、促音化等の音韻現象に対する制約について考察し、右枝分かれの場合のみが制約になるアクセントの一体化および連濁に対し、半濁音化は左右両方の枝分かれ、促音化は右枝分かれのみが制約になるという一般化を示す。第 4 節では、語の品詞性を決定する特定の語尾が特定のアクセント型を要求する等の一般化を行っている。

第 III 章と第 IV 章は、統語論と意味論のインターフェイスに関わる問題を扱うが、第 III 章では名詞を中心に、第 4 章では動詞を中心に論じている。まず、第 III 章の第 1 節では、飽和性という名詞の意味論的な素性を仮定することによって複数の統語現象の分析が可能になることを実証する。第 2 節では、「XのY」という型の名詞句について主要部という統語

的な概念に基づく分析が有効であることを示す。第 3 節では、名詞句の定性と、それに対応する連体修飾の制限的・非制限的という意味論的な概念および統語構造との対応関係について考察し、制限的であれば名詞補部構造、非制限的であれば名詞句付加構造をなしていることを主張する。第 4 節では、心理名詞文における特殊な統語現象に対する説明として、指定、措定という意味論的区別が有効であることを提示する。

続いて、第 IV 章の第 1 節では、移動動詞における対格標示の特殊性について、起点の対格標示の場合は語彙概念構造の局所性と統語構造の非対格性による制約を受けること等を主張する。第 2 節では、受益構文について、与格名詞句の生起が可であるのは典型的には作成動詞の場合であることを語彙概念構造と認知的な構文の鋳型という概念によって説明する。第 3 節では相互行為動詞について考察し、構成的アプローチを補う構文的アプローチの重要性を示す。第 4 節では、結果構文を中心に日英語の対照を行い、日本語は形態的に有標であることを志向するタイプの言語であり補助動詞が発達していることを述べる。

第 V 章は、意味論と語用論のインターフェイスに着目し、助動詞「ダロウ」の意味、用法の詳細な分析を行う。第 1 節では、プロトタイプ、スキーマという概念を説明装置とすることによって、推量から確認要求への拡張関係があり、想像の中での認識という本質的な意味が具体化したものであることを主張する。第 2 節では、「ウ／ヨウ、マイ」という形式についても同様の分析が可能であることを示す。第 3 節では、平叙文の場合だけでなく疑問文の場合でも、不定推量から弱い質問へ、さらには丁寧さの加わった質問へという拡張関係があり、想像の中での認識という本質的な意味が具体化したものであることを確認する。第 4 節では、補説として「カナ」「カシラ」形式についても考察し、弱い質問、丁寧さの加わった質問への拡張の源には、疑念表明という概念もあることを示す。

最後に、今後取り組むべき課題を提示し、本論文がその課題に取り組むための基礎的研究としての意義を有していることを述べる。

論文審査の結果の要旨

第 II 章から第 V 章において論じられているように、これまで見過ごされてきた 16 の興味深い言語事象を取り上げ、インターフェイスに着目した記述と説明を意欲的に行ったことは本論文の大きな貢献である。音韻論から語用論に至る広い射程を有しているとともに、一般化にあたっては、既存の言語理論を援用するだけでなく、その理論を検証する言語現象の範囲を広げているという点で理論的研究への貢献もある。長年にわたる研究成果が凝縮され、それぞれの分析が読み応えのあるものとなっているとともに、その総合化にも成功している優れた論文である。

ただし、複数領域間にまたがる一般化をめざす論考であることのデメリットとして、議論が結論にまで行き着かず、今後の研究にゆだねるとするまとめ方が散見され、実証面での不正確さも無いとはいえない。個別の事象の分析においても、「らしい」には話し手の推論・推測は含まれないと断言してよいのか、「ダロウ」の知識確認用法が生じるにいたった派生過程が明示的には議論されていないのではないか、「ダロウ」における新たな用法の発達を見過ごしているのではないかといった今後検討すべき課題も残されている。また、書

かれた年代が古い論考がいくつかあり、最新の研究が参照されていない場合も見受けられた。

しかし、これらは、本論文が達成したレベルを損なうものではない。現代日本語研究のレベルを高い次元に引き上げ、さらに今後取り組むべき問題のありかを提起した点で、高い評価が与えられるものとなっている。他言語との比較対照研究を行う場合にも、本論文で採用された枠組みは、今後、まず参照されるべきところとなるであろう。

よって、本論文は、博士（文学）の学位を授与するに相応しいものであると認定する。